

コリマ・ユカギール語の動詞パラダイムに おけるゼロ記号の特徴

Characteristics of Zero Expression in the Kolyma Yukaghir Verbal Paradigm

遠 藤 史

Fubito ENDO

1. はじめに

20世紀の言語学の始まりを告げた『一般言語学講義』の中で、ソシュールは、その後の言語学・記号学で一般に「ゼロ記号」（*signe zéro*）と呼ばれることになる概念を論じている。⁽¹⁾ この議論がなされるのは、言語という対象について「共時言語学」（*linguistique synchronique*）と「通時言語学」（*linguistique diachronique*）という2種類の言語学の識別が提起される箇所⁽²⁾の少し後、「内的二面性の例証」の節である（117-122）。この書物での議論の順序に従えば、これらを生み出す2つの観点—共時的と通時的—が分離されることの例証の1つとして、スラヴ語におけるゼロ記号の現象が検討される。たとえばチェコ語の *žena*「妻」は、単数対格 *ženu*、複数主格 *ženy*、複数属格 *žen* という形式を持つ。ここで複数属格の標識はゼロ（何も無い）である。通時的な観点では、この現象は古スラヴ語で語末にあった弱母音の消失によって生じた（*ženŭ* > *žen*）と説明される。しかしそのような変化にもかかわらず、あるいはそれと独立して、共時的な観点では、チェコ語におけるこれらの形式相互間の区別は、他の形式すべてに何らかの標識（-a, -u, -y など）が存在し、複数属格のみに標識が存在しないこと（ゼロ）によって明瞭である。『一般言語学講義』はこの状況を「ある観念を表現するには、必ずしも資料的記号を必要としない」とまとめ、さらに「言語は、なにかと無との対立で満足しうるのである」と述べる（124）。ここで前者はゼロ記号の特徴づけ、後者はゼロ記号の概念を一般言語学的に定位したものと言ってよいだろう。

後者に含まれる「言語は」という表現が示唆するように、ゼロ記号をめぐるこの議論は、共時的観点と通時的観点の分離を例証するというレベルを超え、言語記号そのものの性質という、より高次の問題に関係している。このことは、バイイとセシュエによる再構成を経た『一般言語学講義』の議論の道筋からはすぐにはわからない。⁽²⁾ しかし、ソシュールの講義に出

（1）『一般言語学講義』については小林英夫氏による邦訳（ソシュール 1980）から引用する。ページ数は邦訳のものである。ただしチェコ語の例で、邦訳における「名格」をより一般的と思われる「主格」に変更した。

席した学生のひとり、エミール・コンスタンタンのノート（ソシュール 2007）からは、ソシュールが講義の現場で論じようとしていたことが見てとれる。つまりこちらでは、上述のチェコ語の例が、「言語には実定的な項のない差異しか存在しないのです。これは逆説的な真理です」（176）とか、「厳密に言う、記号など無く、記号間の差異しかありません」（176）などの一般的、かつ本質的な主張の例証としても用いられている（176-178）。この例の直後に現れるのは「差異しかありません。実定的な項などありません」（177）という、かなりラディカルな主張だ。⁽³⁾ 確かに、素朴な見かたをすれば、このチェコ語の例に現れるゼロ記号の現象は、無音がある概念（たとえば複数属格）と結びつくという逆説的な状況であろう。実定的な見かたではたちまち説明に窮するような事態と言ってもよい。この逆説を解消するためには、言語記号間の差異こそが本来的に存在するものだという、より高次のテーゼが要請されざるをえない。このレベルの上昇を講義において促すソシュールの姿勢は、啓発的かつ刺激的である。同時にこのことは、ゼロ記号という現象に言語の深い部分を垣間見することを許してくれる窓のような特質があることを示しているだろう。

言語体系におけるゼロ記号という現象はもちろん、チェコ語を含むスラヴ語に限られるものではない。この論文では、東シベリア（行政的にはロシア連邦サハ共和国（ヤクーチア）コリマ上流地区）に話される系統的に孤立した少数言語であるコリマ・ユカギール語を選び、この言語の動詞パラダイムにおけるゼロ記号の特徴を検討してみたい。⁽⁴⁾ 『一般言語学講義』が述べるように、一般的に言語が「なにかと無との対立で満足しうるのである」とすれば、そのことはコリマ・ユカギール語にも何らかの形で反映しているであろう。加えて、チェコ語を含むスラヴ語とは言語系統も言語類型も異なるコリマ・ユカギール語のような言語を検討することで、より広い視点から共通点あるいは相違点を論ずることもできる。そのことはゼロ記号をめぐる一般的議論に何らかの寄与をなす可能性もあろう。

以下ではコリマ・ユカギール語の定形動詞のパラダイムを材料として論じるが、筆者の知りうる限り、このパラダイムにおいて、ゼロ記号は1つだけではなく、複数の位置に出現し

✓（2）ソシュールによる講義（1907-1911年、ジュネーヴ大学）と『一般言語学講義』との関係、両者の間にあるパイイとセシュエによる再構成の過程に関しては、いわゆる「ソシュール学」の中で精緻な研究が多数発表されている。その成果を反映した一例としてデ・マウロ（1976）を参照。

（3）コンスタンタンのノートでは、142-143ページにもこのチェコ語の例が取り上げられており、そちらは『一般言語学講義』での文脈に近い。本文で注目した部分はノートでは独立した章を成しているように見えるが、章のタイトルはない。ただしその内容は本質的な部分に多く触れているように思われる。時間不足のために中断した未完の章の概要であろうか。

（4）本論文におけるコリマ・ユカギール語のデータは、筆者が行った現地調査に基づく。本論文の研究成果の一部は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）〔海外調査〕「危機に瀕した古アジア諸語の系統的・類型的多様性に関する調査研究」（課題番号19401020）、同基盤研究（B）「北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・歴史的比較研究」（課題番号21401022）、および同基盤研究（C）「コリマ・ユカギール語の統語構造と情報構造の関連究明による統語論記述の精緻化」（課題番号22520434）から補助を受けた。

うる。⁽⁵⁾この状況を整理して論じるため、本論文は以下のような構成を取ることにする。まず第2節では、コリマ・ユカギール語の動詞パラダイム全体の概略を論じ、その中でゼロ記号の出現の可能性のある位置を指摘する。第3節では、上記のソシュールの議論を念頭に置きつつ、人称標識におけるゼロ記号の特徴を論じる。第4節では、ソシュール以降のゼロ記号に関する考察の発展をたどり、次いで、その考察と照応する形でのゼロ記号がコリマ・ユカギール語の動詞パラダイムに認められるかどうかを論じる。

2. コリマ・ユカギール語の動詞パラダイムの概略

コリマ・ユカギール語の動詞パラダイム全般を論じるために、まず次の一般的図式を提示する。これは、この言語の定形動詞の屈折に見られる典型的な図式である：

- (1) [0] 前倚辞＝語幹－[1] 態－[2] アスペクト－[3] 法－[4] 数－[5] 時制－[6] 人称

コリマ・ユカギール語の定形動詞の屈折は、語幹を中心としてその前後に、(1)の図式に従い、1つ以上の文法カテゴリーを標示する前倚辞・接尾辞が、この順序でつくことによって行われる。語幹の後に続くアスペクト以下の文法カテゴリーは、基本的には接尾辞によって実現される。前倚辞の位置に入りうる文法カテゴリーは以下に述べるように多少雑多であるため、(1)の中では特定していない。

現地で収集した民話テキスト資料の中からいくつかの定形動詞を選んで以下にあげる。例の後に日本語訳を付け、語幹の意味と形態素の標示する文法的意味は、日本語訳の後の括弧内に記す：

- (2) a. *tadil'elmele* 「(彼はそれを) 与えたということだ」(*tadi* 「与える」, *-l'el* 不確定法, *-mele* 他動詞 3 人称単数・目的語焦点) [X- 3- 6]
 b. *elmin'tejek* 「(おまえは) 取らないだろう」(*el=* 否定, *min'* 「取る」, *-te* 未来時制, *-jek* 否定法 2 人称単数) [0 =X- 5- 6]
 c. *legite:nul'elŋa:* 「(彼らはそれを) 養っていたということだ」(*legite:* 「養う」, *-nu* 進行アスペクト, *-l'el* 不確定法, *-ŋa:* 他動詞 3 人称複数) [X- 2- 3- 4- 6]
 d. *čirief'elum* 「(彼がそれを) 閉じ込めてしまったということだ」(*čirie* 「閉じる」, *-f* 使役態, *-l'el* 不確定法, *-u-* 挿入子音, *-m* 他動詞 3 人称単数) [X- 1- 3- 6]
 e. *kudduotej* 「(彼は) 殺されるだろう」(*kudd* 「殺す」, *-uo* 受動態, *-te* 未来時制, *-j* 自動詞 3 人称単数) [X- 1- 5- 6]

(5) 定形動詞とは、典型的には主節の末尾に現れ、人称に関して屈折した動詞を意味する。

ここで形態素のグロスの後にある角括弧の中の数字は、(1)の図式中の文法カテゴリーを意味している(語幹はXで示す)。たとえば(2a)の語の中には、語幹[X]、法[3]、最後に人称[6]という順序で形態素が並んでいる。このような並びを多数観察することによって2つのことが分かる。第1に、屈折した定形動詞の語中で、文法カテゴリーの標識(前倚辞・接尾辞)が出現する順序は同一だということである。上記(2a)-(2e)の例で、小さい数字が⁽⁶⁾つねに大きな数字の左側に現れていることに注意されたい。第2に、以上の状況から、コリマ・ユカギール語の定形動詞の屈折は、個々の文法カテゴリーの標識で埋められるスロットを順に並べた形、いわゆるスロット形によって適切に記述することができるということである。ただしスロットの種類は(1)に示したものに限られるので、この言語の定形動詞の場合、アメリカ先住民のいくつかの言語に見られるように非常に多数のスロットが並ぶという状況ではない。

個々のスロットについて特に注意すべき特徴を3点述べておく。まず、(1)の[0]前倚辞のスロットに入りうる前倚辞は次の5つである：否定el=、肯定me=、再帰態met=（「自分(主語)を～する」）、相互態n'e=（「(互いに)～しあう」）、仮定et=。これらのうち3つ(否定、肯定、仮定)は法的意味を添え、残りの2つは態の標識である。頻度は少ないが、意味的条件が許せば、前倚辞は組み合わせられて複数現れることもある：met=（<me=et=）「～だったらよいのに」。⁽⁷⁾次に、[1]態に現れる標識は、項の増減を伴う動詞語幹の派生に用いられる接尾辞と連続的な性質を持ち、厳密な区別はしばしば困難である。たとえば上記(2d)の使役態の標識-ɟ「～させる」は、自動詞から他動詞を派生する接尾辞-ɟ（たとえばlolɬoɟ「沸かす」(他動詞) < lolɬo「沸く」(自動詞)）と、音形も機能もきわめて近い。両者を屈折要素と派生素素とに分かつ基準は実際のところ、個々の要素の生産性の高低に求めざるをえないだろう。また、[2]アスペクトのスロットを埋める標識は生産性の高い-nu「～している」(進行アスペクト)と-nun「～している、よく～している」(習慣アスペクト)の2種であるが、これらの要素の生起はそもそも動詞語幹自体の意味に制約される上、アスペクト的意味を持つ他の標識は動詞語幹内部にも生起しうる。つまり、[1]態と[2]アスペクトのスロットに出現する標識は派生接尾辞と部分的に重複した特徴をもっている。これらは派生接尾辞とある程度の特徴を共有する要素と言えるだろう。

(6) コリマ・ユカギール語には定形動詞以外にも多くの非定形動詞が存在するが、この論文ではページ数の関係で非定形動詞については論じない。しかし非定形動詞においても(1)の順序は基本的に守られると考えてよい。たとえば動名詞の所格形(仮定)のpundu'elɲidejne「あゝのとき(彼らが)話していたなら」(pundu「話す」、-ɲel「不確定法」、-ɲi「3人称」複数、-de「3人称所有」、-j「所格」、-ne「仮定」[X- 3- 4- 6- 他- 要素]など。

(7) これら5つの要素間の共起関係を観察することによって、前倚辞に対して2つ(ないし3つ)のスロットを設定することも可能であろうと思われる。遠藤(2005:94)参照。

以上の図式のもとで、完全な屈折カテゴリーとしてのゼロ記号が出現する可能性のある位置は2つある。1つは〔3〕法と〔5〕時制までの文法カテゴリーのスロットであり、もう1つは〔4〕数と〔6〕人称のスロットである。これらのうち後者は、動詞屈折のパラダイムの中で比較的明瞭に観察できるゼロ記号であり、第1節で紹介したソシユールの考えるものにきわめて近い性質を持っているので、次の第3節で具体的な形式をあげ、詳しく論じる。一方前者は、それらの機能も含めてゼロ記号を想定すべきか否か、慎重に検討する必要がある事例である。こちらについては第4節で検討することにした。

3. ゼロ記号と人称標識

コリマ・ユカギール語の動詞パラダイムにおけるゼロ記号が最も明瞭に観察されるのは、図式（1）の中の〔6〕人称のスロットである。このスロットにゼロ記号が出現するのは、

（a）（直説法）他動詞1人称単数、（b）命令法2人称単数、そして（c）疑問法・否定法・不確定法自動詞3人称単数、の3つの場合である。それぞれ簡単な例をあげる：（a）juö「（私はそれを）見た」（juö「見る」、-φ 他動詞1人称単数）、（b）lek「食べろ！」（lek（<leg）「食べる」、-φ 命令法2人称単数）、（c）elmon「（彼は）言わなかった」（el= 否定、mon「言う」、-φ 否定法自動詞3人称単数）。

ここで人称標識に他の文法カテゴリー（たとえば他動詞、命令法など）への言及が必要なのは、コリマ・ユカギール語の動詞パラダイムでは人称標識の標示が他の文法カテゴリーと相関しているからである。すなわちこの言語では人称標識のパラダイムが少なくとも8セット認められる。それらはまず、法に関連して、（1）直説法、（2）否定法、（3）疑問法、そして（4）命令法の4つに分けられる。つまり命令法と直説法の人称標識は互いに異なるということになる。また（3）疑問法に関しては、その内部でさらに、自動詞と他動詞の別によって異なった人称標識が認められる。さらに（1）直説法に関しては、自動詞と他動詞の区別に加え、主語・目的語に情報構造上の焦点が置かれた場合にはさらに別の人称標識が現れ、都合4セットが存在する。つまりこの言語では、人称標識がつねに同一だとは限らない。⁽⁸⁾

パラダイムごとの具体的な例を観察してみよう。直説法他動詞の、焦点に関して中立なパラダイムは次の通りである。左側に他動詞leg「（～を）食べる」の屈折の例を、右側にそこから抽出された人称標識をあげる：⁽⁹⁾

（8）たとえばラテン語においても類似した特徴が観察される。ここでは動詞「愛する」の各時制における1人称単数を対照すると、amō（現在）、amābam（未完了過去）、amāvī（完了）などとなる。これらの中で1人称単数の人称標識は同一ではない。

(3) 他動詞 leg 「食べる」:			人称標識
1 人称単数	lew		-φ
2 人称単数	lemmik		-mik
3 人称単数	legum		-m
1 人称複数	legi		-i
2 人称複数	lemmet		-met
3 人称複数	leŋŋa: ~ leŋŋam		-ŋa: ~ -ŋam

一方、直説法自動詞の、焦点に関して中立的なパラダイムは次の通りである。自動詞 eŋ 「生きる」の屈折と人称標識をあげる:

(4) 自動詞 eŋ 「生きる」:			人称標識
1 人称単数	eŋje		-je
2 人称単数	eŋjek		-jek
3 人称単数	eŋi		-i
1 人称複数	eŋji:li		-ji:li
2 人称複数	eŋjemet		-jemet
3 人称複数	eŋi		-ŋi

(3) と (4) の対照から明かなように、両者の人称標識は一致しない。したがってこれらは互いに別の体系を作り上げていると考えるほかはない。なおここで 3 人称単数と 3 人称複数の標識を比べると、-ŋa ~ -ŋi という複数標識が抽出できる。これは (1) の図式の [4] 数のスロットを埋める要素であり、以下のパラダイムにも規則的に出現する。これは人称標識と形態論的に密接な関連を持っているので、一体のものとして以下論じる。

人称標識のゼロ記号が生じるのは、(3) の 1 人称単数の位置である。このゼロ記号は、第 1 節で検討したチェコ語の例 zen 「妻 (複数属格)」と同様の特徴を持つ。すなわちこの 1 人称単数の人称標識は音的な内容を全く持たないにもかかわらず、他のすべての形式が何らかの音形 (たとえば 3 人称単数 -m) を備えていることによって、人称標識相互間の区別は明瞭である。これはまさしく『一般言語学講義』が「言語は、なにかと無との対立で満足しうるのである」と述べたことの、ひとつの現れであると言ってよいだろう。これと比較して興味深いのは (4) の体系である。こちらではすべての人称標識に互いに異なる音形が備わって

✓ (9) この動詞の場合、語幹末尾の子音に形態音韻的交替 lew ~ lem ~ leg ~ leŋ が起きている。この種の交替は形態素の接合点で子音音素の連続が生じたときに起こりやすい。ただし動詞の場合、形態音韻的交替は語幹の側に起こることが多く、人称標識の音形は一般に安定している。

いて、人称標識相互間の区別は当然ながら明瞭である。ここで注意すべきなのは、人称標識を互いに区別するという点において、両者の体系の間には何の違いもないということだ。ゼロ記号を持つ体系も、それを持たない体系も、パラダイム全体としては同等のはたらきを示している。このことはソシュールの言う「差異しかありません。実定的な項などありません」（ソシュール2007:177）という主張と響きあう。

次にあげるのは疑問法（自動詞）のパラダイムである：

（5）自動詞 modo 「住む，暮らす」：		人称標識
1 人称単数	modom	-m
2 人称単数	modok ～ modojok	-k ～ -jek
3 人称単数	modo	-φ
1 人称複数	modoluok	-luok
2 人称複数	modojomot	-jemet
3 人称複数	modoŋi	-ŋi

ここでも再びパラダイムの中にゼロ記号が現れる（3 人称単数）。このゼロ記号がすぐ上で検討したものと等しい価値を持っていることは、改めて議論するまでもないだろう。疑問法（自動詞）のパラダイムに現れるゼロ記号は、それが体系の中で唯一音形を欠く記号であるというまさにその特徴によって、3 人称単数であることを明瞭に示している。⁽¹⁰⁾

ここで（3）と（5）を対照すると、1つの興味深い事実に気づく。それは、両者のパラダイムの中でゼロ記号はそれぞれ1つしか現れないということである。これは偶然の一致ではなく、ゼロ記号そのものの特徴から体系的に要請されたものと言ってよい。ゼロ記号が体系内で他のものと区別されるという価値を十分に発揮するには、与えられた体系の中でゼロ記号は1つだけであることが最も望ましい。仮に体系の中に2つのゼロ記号が存在するとすれば、明瞭な区別はそれだけ困難になるからである。このことは、ゼロ記号というものが、それを含む体系の存在をつねに前提とすることを示している。同様に次の命令法のパラダイムでも、ゼロ記号の生じる位置は1つに限られる（2 人称単数）。命令法には自動詞と他動詞の別はなく、1 人称単数の形式は欠けている：

(10) 疑問法はテキストの中に現れる頻度が低く、話者に直接尋ねても安定した形式が得られにくい。ここでは筆者の調査結果に基づいた形式をあげておく。筆者の調査ではこれらのうち、1 人称と 3 人称の形式は単複両方とも比較的安定している。なお（5）の 2 人称の人称標識中の母音 o は、語幹内の o による前進同化によって生じたものである。

(6) 自動詞 mon 「言う」: 人称標識

2 人称単数	mon	-φ
3 人称単数	mongen	-gen
1 人称複数	monge	-ge
2 人称複数	moŋŋik	-ŋik
3 人称複数	moŋŋigen	-ŋigen

より観察を進めれば、命令法 2 人称単数にはもう 1 つの異形態 -k が存在することが明らかである: kejk 「くれ!」(kej 「与える」, -k 命令法・2 人称単数), keluk 「来い!」(kel 「来る」, -u- 挿入子音, -k 命令法・2 人称単数) など。つまりゼロ記号は、命令法 2 人称単数を表す異形態 -φ ~ -k の 1 つであるが、その場合でも人称標識を互いに区別する体系全体の性質は変わらない。ゼロ記号も -k も、この体系内で等しい価値を持ち、他の人称標識と明瞭に区別されうる。

以上で検討してきたパラダイムは、いずれも定形動詞の屈折パラダイムというより大きな体系の中での部分集合だということを想起しなければならない。この大きな体系の中では、複数のゼロ記号が出現するという問題が生じうるだろう。その場合、複数のゼロ記号はどのように区別されうるのだろうか。この問題には 2 つの視点から答えることが可能だと思われる。1 つは『一般言語学講義』がすでに「絶対的恣意性と相対的恣意性」(182-186) の節で指摘している通り、「絶対的に恣意的なのは、記号の一部のみである; (中略) 記号は相対的に有縁化されうるのである」(182) という言語体系の特徴があらう。ソシュールはフランス語の例をあげて「かくして vingt は無縁であるが, dix-neuf はおなじ程度にはそうでない」(182) と述べている。つまり言語の線的特質に基づく統合 (syntagme) の関係は、連合の関係での差異だけにに基づく体系に制限を加えうる。コリマ・ユカギール語の場合、統合の関係の中では、他動詞は目的語の存在によって、命令法は顕在的主語の欠如によって、また疑問法は疑問詞の存在によって、それぞれ区別されうるのだ。またもう 1 つは、ゼロ記号そのものではなく、それが形態論に残す痕跡による区別の可能性である。以上 3 種のゼロ記号のうち体系内で区別が最も紛らわしいのはおそらく、直説法他動詞 1 人称単数と命令法 2 人称単数であらう。この言語においては主語・目的語は談話上復元可能であれば省略が可能だからである。興味深いことに、この 2 つの形式が形態論上区別されることがありうる。たとえば他動詞 leg 「食べる」の場合、1 人称単数の形は (3) より lew である。これに対して命令法 2 人称単数の形は lek となる。同様に他動詞 nug 「探す」では、1 人称単数 nuw, 命令法 2 人称単数 nuk となる。このような状況がつねに可能だというわけではないが (たとえば他動詞 čow 「切る」は両者の形がいずれも čow), おそらく異形態 -k の影響もあって、命令法の側に破裂音 (閉鎖音) が出現しうる顕著な傾向が指摘できる。以上の状況は、ゼロ記号は単独で存在

しうるものではなく、それを含む大小さまざまな体系のもとでの対立を前提にはじめて存在するものであることを示しているように思われる。

4 ゼロ記号とシニフィエをめぐる

コンスタンタンのノート(ソシュール 2007)において、上述のチェコ語のゼロ記号の例をあげた後でソシュールは「ここで話しをしているのは、シニフィアンの差異です」(177)と注意を促す。周知の通りシニフィアン(signifiant)は、記号を構成するもう1つの要素であるシニフィエ(signifié)とともに、ソシュールによって導入された用語である。最初にあげたチェコ語のゼロ記号は何の音形も持たないのだから、これが言語記号の聴覚イメージに相当するシニフィアンの側に関係することは頷ける。とすればここで、言語記号の概念に相当するシニフィエの側に関係するようなゼロ記号の存在は考えられないのだろうか、という問いを発してもよからう。

ロマーン・ヤーコブソンは1930年代にこの問いをさらに推し進め、ゼロ記号をめぐる考察に新たな局面を切り開いた(Jakobson 1971a, 1971b)。上の問いについてヤーコブソンは、「言語はシニフィアンの局面だけでなく、シニフィエの局面においてもまた『なにかと無との対立で満足しうるのである』」(Jakobson 1971a:212;筆者訳)と肯定的に答える。そして音韻論、統語論、統語論、さらには文体論の各領域にわたってこの意味でのゼロ記号が認められる可能性を論じている。広範囲の話題を扱ったこの論文の全体を検討する余裕は本論文にはないが、シニフィエの側でのゼロ記号に関わるものとして典型的な議論であるロシア語のアスペクトの一部を紹介してみよう。ヤーコブソンはロシア語のアスペクトについて、完了アスペクト(l'aspect perfectif)は過程の絶対的な終わりを示すが、これに対して不完了アスペクト(l'imperfectif)はゼロアスペクト(aspect zéro)で、期限の問題に触れないと指摘する(213)。同様に定アスペクト(l'aspect déterminé)は1つと考えられる行為を、ゼロアスペクトとしての不定アスペクト(l'aspect indéterminé)は何もそういうことを示さないと指摘する(213-214)。重要なことはここで「ゼロアスペクト」とされる側はアスペクト的概念を何も積極的に表そうとしていないということだ。その例証としてヤーコブソンは、定アスペクトのplyt'「泳ぐ」(1つの行為)に対して、不定アスペクトのplavat'は1つの行為、繰り返される行為、実現していない行為など様々なものを表しうるという事実をあげている。⁽¹¹⁾

ヤーコブソンの議論はゼロ記号をめぐる考察に新鮮な風を導き入れるものであり、その影響は言語学の領域を超えて広がっている。一例をあげれば、ロラン・バルトは『零度のエク

(11) ヤーコブソンによれば、シニフィエにおける「なにかと無との対立」と、シニフィアンにおけるそれとの関係は全く恣意的であり(purement arbitraire)、可能ないくつかのケースがありうるという(Jakobson 1971a:214-215)。以下で考察するコリマ・ユカギール語の例は、ヤーコブソンのあげた「ゼロ格とゼロ語尾の対応」に近似するケースである。

リチュール』(バルト 1971)において文学評論に「ゼロのエクリチュール」というアイディアを導入した。バルトは序文で「エクリチュールは今日、不在という最後の転身に到達している」(8)と総括した後、「言語の痕跡をもった秩序への一切の隷従から解放された白いエクリチュールを創造することである」(72)というヴィジョンを語り、こうした不在のエクリチュールの視点から同時代の文学を「こうした透明なコトバは、カミュの『異邦人』によって創造されたが、それはほとんど文体の理想的な不在といっていい不在の文体を成就した」(73)と評価した。ソシュールから始まったゼロ記号の考察が様々な分野で可能性を開花させるに至った一方で、その出発点となった言語学の側では、とりわけ言語記述への適用という点で、シニフィエの側のゼロ記号を設定することについてはなおも難しい問題が残っている。それは、ナイーブにこのようなゼロ記号を設定することにより、記述が際限なく膨張してしまう恐れがあるということだ。本論文をしめくくるにあたり、コリマ・ユカギール語の動詞パラダイムを題材にこの問題を論じたい。

先にあげた図式(1)に関してすでに指摘したとおり、(1)の[3]法と[5]時制の文法カテゴリーのスロットにはゼロ記号が出現する可能性がある。これはすでに論じた[6]人称(および[4]数)のスロットに生じうるものとは性質が異なり、ヤーコブソンが指摘したようなシニフィエの側のゼロ記号に相当する。もっともわかりやすい例として[5]時制について考察しよう。次の例に見るように、この位置には未来時制の標識-t~-teが生じうる。未来時制は発話の時点でまだ実現されていない未来を示す(例(2b)も参照)：

(7) met juö-t-φ kin-tek ta:t jaχta-l.

1 単 見る-未来-他 1 単 誰-焦点 そのように 歌う-動名詞

「私は誰がそのように歌っているのか、見てみよう」(他 1 単=他動詞 1 人称単数)

コリマ・ユカギール語で時制のカテゴリーに関して未来と対立するのは過去・現在時制であり、形態論的にはゼロ記号である。過去・現在時制は意味としては汎時的な側面を持ち、過去あるいは現在の特定の時点で起こった出来事を表しうるほかに、特定の時点にこだわらない恒常的な状態もまた表しうる(たとえば teriken'ej「(彼には)妻がいた、いる」(terike「妻」,-n'e「～を持つ」,j 自動詞 3 人称単数))。上記のヤーコブソンの議論をここに適用すれば、過去・現在時制は「ゼロ時制」であると言えるだろう。

同様のことは法についても言える。話者が直接経験していない(したがって推測も含みうる)出来事を語るときには接尾辞 -i'el が多用される。この標識を法の文法カテゴリーと解釈して不確実法と呼ぶことにしよう。⁽¹²⁾当然のことながら不確実法は民話の語りの中に頻繁に出現する。ところが興味深いことに、不確実法の文が連なる民話の途中で直説法の動詞(ゼロ記号)が現れることがある：

- (8) […]*pie budiet jaʒta-l mödu:l'el-φ. meʒʒe-t*
 山 上から 歌- 動名詞 聞こえる- 不確実法- 自3単 眼が覚める- 副動詞
oɬo-j. mon-i.
 立つ- 自3単 言う- 自3単
 「(…) 山の上から歌が聞こえた。(彼は) はっとした。(彼はこう) 言った」
 (自3単=自動詞3人称単数)

この例の中では定形動詞 *oɬo-j* と *moni* が直説法である。したがってこの両者には不確実法の標識が認められないが、語り手は自分が直接経験していない出来事を語っているのだから、ここは不確実法が予想される文脈であろう（現に1番目の動詞 *mödu:l'el* はそうになっている）。このような用法から見て、直説法は文脈により不確実法の領域を表すことが可能であり、ヤーコブソンの言う「ゼロ法」であると言うことができよう。

以上のような考察は、コリマ・ユカギール語の動詞パラダイムにおける諸要素、とりわけゼロ記号によって表されるような要素に関するより深い理解を可能にすることは確かであろう。しかしその反面、このような見かたを押し進めていくならば、動詞の形態論的記述は必然的に膨張し、複雑にならざるをえない。たとえば(8)の2番目の定形動詞 *oɬo-j* 「(彼は) 立った」は、ゼロ時制でゼロ法なのであるから、厳密に表記すればスロットの欠落部分2箇所ゼロ記号を用い、*oɬo-φ-φ-j* と表記するべきだということになろう。コリマ・ユカギール語は、語中の形態素の分節が容易な、膠着型 (agglutinative) のタイプを示す。このような言語にかくして多くのゼロ記号を導入すれば、形態論的記述がともすれば不必要とも見える煩雑さに陥ってしまうことは容易に予想される。言語学におけるゼロ記号の考察は、その嚆矢となったソシュールも、その考察を発展させ深めたヤーコブソンも、語中の形態素が分節しがたく、屈折がパラダイム中心に記述されがちな融合型 (fusional) のタイプの言語（たとえばチェコ語・ロシア語・ラテン語など）を主な考察対象としてきた。融合型のタイプの言語におけるゼロ記号の考察が豊かな結果をもたらしたことは疑い得ない一方で、コリマ・ユカギール語のような膠着型の形態論的タイプの言語の記述の中にどのようにゼロ記号を位置づけていくべきかについては、より広範囲にわたるデータと考察が今後必要とされていよう。

✓ (12) よりわかりやすいこの法の名称としては、話者が推測に基づいて語ることに注目して「推測法」「推量法」、あるいは他者の経験を間接的に伝えることに注目して「伝聞法」などの名称なども可能ではないかと思われる。今後の検討課題としたい。

参考文献

- バルト, ロラン (1971)『零度のエクリチュール』渡辺淳・沢村昂一訳. 東京: みすず書房 (Roland Barthes (1953) *Le degré zéro de l'écriture suivi de éléments de sémiologie*. Paris: Éditions de Seuil).
- デ・マウロ, トゥリオ (1976)『「ソシユール一般言語学講義」校注』山内貴美夫訳. 東京: 而立書房 (Tullio De Mauro (1970) *Ferdinand de Saussure, Corso di linguistica generale, introduzione, traduzione e commento*. Universale.)
- 遠藤 史 (2005)『コリマ・ユカギール語の輪郭—フィールドから見る構造と類型』名古屋: 三恵社.
- Jakobson, Roman (1971a) *Signe zéro*. In: *Roman Jakobson selected writings II: word and language*. 211-219. The Hague/Paris: Mouton.
- (1971b) *Das Nullzeichen*. In: *Roman Jakobson selected writings II: word and language*. 220-222. The Hague/Paris: Mouton.
- Krejnovič, E. A. (1982) *Issledovanija i materialy po jukagirskomu jazyku*. Leningrad: Nauka.
- Maslova, Elena (2003) *A grammar of Kolyma Yukaghir*. Mouton Grammar Library 27. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- ソシユール, フェルディナン・ド (1980)『一般言語学講義』小林英夫訳. 東京: 岩波書店 (Ferdinand de Saussure (1949) *Cours de linguistique générale publié par Charles Bally et Albert Sechehaye*).
- (2007)『ソシユール 一般言語学講義 コンスタンタンのノート』影浦峯・田中久美子訳. 東京: 東京大学出版会.
- Whaley, Lindsay J. (1997) *Introduction to typology: the unity and diversity of language*. Thousand Oaks: Sage Publications.